



Title	ポストソ連期アゼルバイジャンの政治変容 : 旧ソ連地域における政治体制の事例研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	立花, 優
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第11060号
Issue Date	2013-09-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/53786">http://hdl.handle.net/2115/53786</a>
Rights(URL)	<a href="http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yu_Tachibana_review.pdf (「審査の要旨」)



[Instructions for use](#)

## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名： 立花 優

主査 教授 宇山 智彦  
審査委員 副査 教授 松里 公孝  
副査 准教授 村田 勝幸

### 学位論文題名

ポストソ連期アゼルバイジャンの政治変容：旧ソ連地域における政治体制の事例研究

本論文は2013年5月31日に提出され、同年6月7日に審査委員会が補足した。その後5回の審査委員会と、7月1日の公開口頭試問を経て、7月19日の文学研究科教授会において審査結果報告を行った。

旧ソ連諸国は、ソ連崩壊当時には、共産党一党独裁から民主主義へ転換することが諸方面から期待されていたが、実際には多くの国で、新たな権威主義体制が成立したり、ある程度民主化したものの政権が安定しない状況が続いたりしている。近年の比較政治学では、ある程度競争的な選挙は行われるものの実質的に権力が独占されている競争的権威主義体制が注目を集め、旧ソ連諸国の一部もその枠組みで比較研究の対象になっているが、国による研究状況の違いが著しく、また権威主義体制論にも再検討の余地が大きいため、旧ソ連諸国政治の比較政治学的研究は発展途上にある。

本論文は、このような研究状況を意識して着想された事例研究であり、アゼルバイジャン政治に関し、法令や現地報道、議会議事録などを丹念に読み解いたうえ、現地での選挙活動の観察なども交えた、詳細かつ高水準の実証研究となっている。民族紛争や「親子世襲」など時事的な興味を中心とする概論レベルにとどまるが多かった先行研究を、本論文は優に乗り越えていると審査委員会は判断した。アゼルバイジャンではメディアの現地語化が大幅に進んでいるにもかかわらず、国外の研究者は未だに英語・ロシア語の情報源に頼ることが多いが、本学位申請者はアゼルバイジャン語のメディアを丹念にフォローするという、言うは易く行うは難いことを実行している。人事や大統領令など数値化可能なデータも根気よく集め、その政治的な意味を説得力ある形で抽出している。特に新アゼルバイジャン党の組織構造や人員配置、党財政を実証的に解明したこと、議員の利益誘導的な活動や選挙運動を生々しく描き出したことは、従来の研究にはない成果である。また、ステレオタイプの俗説に陥らないよう慎重な態度を堅持しており、アリエフ親子のもとで同郷のナヒチェヴァン出身者が権力をふるっていると「クラン政治」論に対しては、閣僚の出身地に特に偏りはなく、安易にアゼルバイジャン政治の「前近代性」を強調することは避けるべきであると指摘している。

また、過去20年余りのアゼルバイジャン政治の歩みを、編年体ではなく、論点・分析視角に合わせて記述しており、それぞれの論点について、比較政治学や旧ソ連諸国政治研究における先行研究の分析手法を、吟味しながら適用している。従って本論文は基本的に一国政治研究でありながら、比較政治学的な関心によく応え、特に非民主的体制においても制度が重要な意味

を持ちうるという近年の研究動向に対し、有意義な事例を加えるものとなっている。同時に、編年体ではないと言っても、現代史的な記述の深みに欠けるわけでは決してなく、ソ連崩壊直後の民族紛争と政治の混乱による苦しい初期体験が、ヘイダル・アリエフ政権の成立とその後の運営にとって持った意味をよく描き出している。

口頭試問で審査委員会は、上述のような本論文の研究成果を高く評価すると同時に、ナゴルノ・カラバフ紛争に関する第四章が他の章とは異質であるなど、論文の構成に改良の余地があること、ロシア、ウクライナや中央アジアに関する研究を参照する一方で、グルジアやアルメニアの政治との比較は行っていないため、南カフカス地域政治論になっていないことを指摘した。また、制度重視の研究潮流に沿うと同時にその限界をも表す事例を提示しているため、理論的先行研究の批判に踏み込んだ方が、オリジナリティをより明らかに示すことができると思われる。新アゼルバイジャン党が苦しい初期体験によるまとまりを持ちながらも、旧ソ連圏によくある、行政府に対する補助的与党になってしまった理由など、より掘り下げて解明する必要がある問題も残されている。しかしこれらは今後の研究の中で解決すべき課題であり、アゼルバイジャン政治に関する多面的・実証的・理論的研究として世界的にも類例のない本論文の画期的意義を損なうものではない。

以上のような理由により、審査委員会は全員一致で、本論文は博士（学術）の学位授与にふさわしいとの結論に達した。